断章

旭川のアイヌ語地名研究

(145)

高橋 基

―北海道の三大河川を下る―

前回は、「丸木舟の作製と天塩川下り」を紹介した。これを読まれた読者から、「北海道の三大河川下り」についても紹介してほしいとの要請があったので、特別編の最後として、音威子府高校地名調査部の誕生を含めて述べさせていただく。

そもそも筆者がアイヌ語地名を調査することになった契機は、国語の教科書に、徳川夢声と金田一京助の対談が掲載され(『週刊朝日』―昭和二十九年十一月二十八日号―徳川夢声連載対談「問答有用」からの転載)、「音威子府は、アイヌ語由来の地名である。」…とあり、音威子府村のアイヌ語地名の調査を開始した。

最初は、村内の咲来は、「サク・ル(sak-ru夏・道)」、音威子府村のシンボルの音威富士(四八九メートル)の裾野を流れる水道の沢は、「ル・ペシ・ペ(ru-pes-pe道・それに沿って下ってくる・もの=川)で、天塩川筋からオホーツク海へのアイヌの人たちの「夏の道」と「冬の道」の交通路であることを解明した。この調査が発端となって、昭和四十九年に、「地名調査部」を創設し、「天塩川筋のアイヌの主な交通路…十五ルート」を実際に踏査して調査した。

昭和五十一年には、『音威子府村史』に、「音威子府村のアイヌ語地名」と、「松浦武四郎と音威子府」を執筆掲載した。

また、昭和五十一年からは、**図①**の「北海道三大河川踏査略図」のように、北海道の三大河川、すなわち天塩川・石狩川・十勝川の水源の山に登頂後、四人乗りゴムボートで三大河川を下り、松浦武四郎の記録の追跡調査を実施した。

図① 北海道三大河川踏査略図

昭和五十一年は、**写真②**のように、七月三日に天塩岳山頂に立ち、八月二日に岩尾内ダム下流を出発し、七泊八日で河口に到着した。

昭和五十二年には、**写真③**のように石狩川の水源の石狩岳に七月二十三日に登頂、七月二十八日に愛別町愛別橋で大津に到着した。

三大河川は、それぞれ個性的であるが、最も原始的な要素と、松浦武四郎の記録が残っていたのは、文句なしに天塩川であった。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

写真② 天塩岳山頂と天塩川河口ゴール

写真③ 石狩岳山頂と石狩川河口ゴール

写真④ 十勝岳山頂と十勝川河口ゴール